

# THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニュースレター

NO. 58

2008年4月

Special to the Newsletter

## アメリカスの最近の政治動向 米国の大統領指名争いとカリブ海近隣の動き

吉川 敏博

今年の米国は大統領選挙年でもあり、昨年からの白熱した予備選と、候補者同士の足の引っ張り合いや傷つけ合いなどがあり非常に熱い。共和党は候補者が次々と落伍していき、事実上ブッシュ現政権を引き継ぐマケイン候補に絞られたが、何しろ高齢で今まで70歳を越えた大統領は誕生していない。そうした中であって、今回の選挙で私が関心を持つのは民主党の予備選挙を勝ち抜き最終候補者に残った二人である。その一人は女性初の大統領候補をめざすヒラリー・クリントン上院議員であり、もう一人はケニア生まれの黒人の父親と白人の母親をもつバラック・オバマ上院議員である。両候補とも「CHANGE（変革）を米国に起こすのだ！」を選挙公約に掲げ、クリントン候補は女性、労働者、白人、ヒスパニック層の票を集め、オバマ候補は男性、中上流階級、若者、黒人層に人気がある。がっぷり四つに組んだ両者であるが、民主党の代表候補になるために必要な獲得代議員数2025を集めるには両候補ともその数に達せず、たとえオバマ氏が代議員数で上回っても、累積得票数ではクリントン氏が勝るという展開も予想される。したがって、この夏の党全国大会において有力議員（Superdelegates）約800名による投票で政治決着をつけることになりそうだ。この両者の対決、ジェンダー問題か、それとも人種問題がその決め手になるのか、候補者選びが見ものである。米国のタイム誌（2008年2月18日付け）では予備選の特集を組み、その中で Why Not Both?（二人のペアーでどうだ？）と民主党員が期待するこの二人による「夢」の正副大統領候補が実現する可能性を示唆している。もし、それが実現すると最強のペアーとなり、最終的な候補者選びの動向に目が離せない。

民主党予備選ではジェンダーや人種問題がクローズアップされているが、クリントンが大票田のカリフォルニア州やテキサス州で勝利した背景には、今や黒人を抜いて最大のマイノリティとなっているヒスパニック票が大いに絡んでいる。ヒスパニックの人口比率では、例えば、ニューメキシコ州（42%）、テキサス州（35%）、カリフォルニア州（32%）、アリゾナ州（25%）、ネバダ州（20%）であり、これらのヒスパニック住民の多い州ではいずれもクリントンが勝利している。

このように、大統領選の上にも多大な影響を与え、年々増加するヒスパニック層が自分たちに理解を示す（これは夫のビル・クリントンがヒスパニックの雇用状況を改善したことに

よる)クリントン候補に票を投じている。ここでかれらが現在抱える諸問題の背景を少し考えてみたい。

まず、かれらの多くは米国経済の低所得者層に甘んじ、経済的に困窮している。その原因の一つが言語の問題である。どの社会についても言えることだが、移民先の社会に融合するにはまずそこで話されている言葉を習得することが必須の条件である。しかし、ヒスパニック集団の場合は必ずしもそうではない。これが通常の移民集団が辿るプロセスと異なり融合する意思が希薄であると映る一因になっている。

また、これと関連するものに、米国で深刻化してきている教育問題がある。最近の米教育省の発表によると中高校を退学する数が年間120万人を突破したという。この危機的状況を米国のテレビ局(ABC)が4月1日に特集を組み報道していたが、そうした退学者の多くは英語が十分理解できないヒスパニック系の生徒なのである。

このように十分教育を受けることなく社会に出て行くかれらは必然的に知的専門職や管理職につけるはずもなく、その結果、低所得者層を形成し福祉手当に依存することになっていく。

以上のように問題を孕んだヒスパニック層の影響力は経済的、政治的に年々強くなり、コロンビア大学教授のハンチントンの指摘によれば(『分断されるアメリカ』)ヒスパニックは二つの目的を志向するようになってきているという。

一つは、アングロ・プロテスタント社会に自分たちを同化させないことであり、もう一つは、米国全体を二つの言語、二つの文化・社会に変えることの二つであると批判している。

こうした偏見に満ちた意見は、ネオ保守主義者の代表的なものではあるが、米国の人種地図が白人対黒人という二極構造から、今や黒人を抜き最大マイノリティとなったヒスパニックを入れた三極構造に様変わりしつつあるのも事実である。

このような人種的また民族的に複雑化した状況下での大統領候補指名争いと大統領選挙の結果は、米国社会の動向と将来の方向性を知る上で私にとっては大変興味深い。

ブッシュ政権が残した大きな負債を引き継ぐ次期大統領に期待されることは、まず、イラク戦争で気まづくなったフランスを始めとしたヨーロッパ諸国との冷えた軍事外交関係の修復。また、イスラム過激派によるテロ攻撃への対策や、「悪の枢軸」と非難したイランの核問題、そして中近東の火種の元となっているパレスチナ問題など、解決をみていない課題を解決することである。内政面では、サブプライムローンが引き金となりFRB(米連邦準備制度理事会)が発表した景気後退への打開策をどのようなものにするのかを提示する必要がある。

このように民主党、共和党を問わず米国の抱える内政、外交上の問題は大変複雑であり、クリントン、オバマ、そしてマケインのいずれの候補が大統領になったとしても、難問と対峙することになる。

米国の大統領選挙動向に耳目を奪われている最中に、カリブ海のキューバではカストロが首相の坐を実弟に委譲するというニュースが飛び込んできた。

カストロ首相は、1959年アメリカの事実上の傀儡であったフルヘンシオ・バティスタ政権を倒し、キューバを社会主義国家に変え共産党を結成して以来キューバを文字通り牽引してきた第一人者である。中南米諸国に対し宗主国さながらに振る舞い続ける米国の外交政策や、軍事独裁政権への肩入れに対して、対抗するカストロの姿に共感する中南米の国は多い。

しかし、高年齢と体調不良により2008年2月19日、共産党の機関紙グランマ上で、国家評

議会議長と軍最高司令官を引退する意向を示し2月24日、ハバナの国際会議場で開催された人民権力全国会議で国家評議会議長の退任が決まった。国家元首としての第一線から身を引くとは言え、国家政策には影響力を今後も行使し続けていくものと予想される。

このカストロ首相退任にすばやく反応したのがフロリダ州に居住するキューバ難民たちで引退の報を聞くや歓声を上げ喜んだ。私が米国にいた昨年もカストロ首相の死亡説が流れ、歓喜し小躍りするマイアミのキューバ人を見た。かれらは、カストロが死亡すればすぐさまキューバに帰り以前の生活に戻るのだ、とテレビ局のインタビューに答えていたのが印象的であった。フロリダに住むキューバ人もヒスパニックであるが、かれらはキューバから逃れてきた政治難民であり、南西部を中心としたメキシコ系の経済難民とは異なる。

カストロ首相の政権委譲の動きがあったその時期にカリブ海の近隣諸国であるコロンビア、ベネズエラ、エクアドルでは不穏な空気が流れ緊迫した事態が起こった。実はこの三か国隣国同士だが親米派と反米派に分かれる。コロンビアが親米に対し、それを反米派のベネズエラとエクアドルが取り囲み、北からはこれまた反米派のニカラグアがコロンビアに睨みをきかせている。プッシュ大統領は、コロンビアのFARC (Fuerzas Armadas Revolucionarias de Colombia:コロンビア革命軍)をテロリスト集団と判断し、それを撲滅するためコロンビアに経済的、軍事的支援をしている。

米国の支援を受けてきたコロンビアのウリベ大統領はテロリスト攻撃を目的と称して隣国のエクアドルに軍隊を入れ掃討作戦を展開したのである。これに強く反発をしたのがエクアドルのコレア大統領、ニカラグアのオルテガ大統領、そしてベネズエラのチャベス大統領である。反米派であるベネズエラのチャベス大統領は、コロンビアの軍事行動を阻止するためには軍隊発動も辞さない姿勢を示し、一触即発という事態にまで発展し緊張が走った。その後、ようやく中南米諸国会議においてコロンビア側が軍隊を引き上げるという形で落ち着いたが、米国側につくラテンアメリカ諸国と反米の立場をとる国々との衝突は今後も起こりうる火種を抱えていることを露呈した事件である。

米国の中南米外交は多岐に亘っており、その歴史をよく知らない者にとっては理解できない点が多い。例えば、米国はアフガン戦争やイラク戦争で捕虜にしたアルカイダやタリバンのイスラム過激テロ容疑者をグァンタナモ収容所に収監しているが、この収容所は実は米国にあるのではなくキューバにある。米国とキューバとの関係を調べてみると、1898年の米西戦争で米軍がキューバを占領し、米国の援助でスペインから独立したキューバ新政府は1903年、グァンタナモ基地の永久租借を認め、その結果、今日もそこに米軍基地が存在するのである。素朴な疑問は、反米主義をあからさまに表明しているカストロキューバ政府がなぜ反対しないのか、これも理解に苦しむところであるが、2001年の9・11に世界貿易センタービルが同時多発テロにより崩壊した時、キューバ政府はそうしたテロ行為を批判しており、表立って反対できないのかも知れない。いずれにしてもキューバという反米国の中に米軍基地が残されていること自体に驚きがある。

私は米国内のヒスパニックを研究対象にしているが、政治、経済、そして軍事や外交をも含めたアメリカスの総合的研究が学会員を中心に南北双方から一層進められることを期待して止まない者の一人である。

(天理大学国際文化学部教授)

## 文学の中のアメリカ生活誌(49)

新井 正一郎

US Currency(米國通貨) アメリカでなかなか標準化が進まなかったものの一つにcurrency(流通を意味するラテン語currentialから、通貨の意味で1699年に英語に入ったもの)がある。ニューイングランドにやってきた初期のイギリスからの入植者たちは、わずかばかりの本国の通貨を持参してきたが、本国からの輸入品(鋤、燭台、ハンカチ、カレンダー等)の購入でたちまちなくなった。加えてイギリス政府は1752年に、植民地が鋳貨を製造することさえ禁じたのである。植民地一帯では独立戦争まで通貨不足がつづいたために、入植者たちは貨幣決済の代用として、barter(物々交換)に依存するようになった。barterはcountry pay(現物貨幣)とも言われた。1643年頃には、この語は本国イギリスの法貨の意味で使われていたが、まもなく村の雑貨店に持ち込まれる品物と交換できる貨幣代用物 塩、牛肉、豚肉、ビーバー、獣脂、斧等 を指すようになった。支払い手段に使われたこれらの商品は、1637年頃からtruck(交換するという意味の古いフランス語troquerから)と言われた。植民地時代の人々の経済の中心がしだいに牧畜や狩猟から農業に変化するにつれて、上述の品物に代わって、穀物や野菜等の農作物が公の支払い手段に利用されるようになった。truckという語は、今ではtruck farm(市場向け菜園、1866年の言葉)といった表現に名残りをとどめている。

前述の植民地での通貨不足がもたらしたもので興味深いのは、マサチューセッツでShay's Rebellion(シェイズの反乱)という貧しい階層による暴動が発生したことだ。同じ問題が発端になって、ニューヨークでは教会が4ペンス紙幣を発行した。もっとも植民地時代の商売をしている人たちは、早くから始めた外国貿易のおかげで、多様な外国硬貨、例えばポルトガルのjobannes(ジョアン)、スペインのdoublon(ダブロン)やreal(リアル)、フランスのsou(スー)などを手に入れ、これらを一般的流通手段として使っていた。そのなかで、最も優位な位置を占めたのは、スペイン貨幣であった。特に対メキシコ戦争(1846-48年)によって合衆国が獲得したメキシコ領土(南西部)では、この通貨は多量に出回っていた。通貨不足が顕著になった南北戦争の時期には、東部や西部でも2セントと評価されたSpanish quarter(スペイン・クォーター)が流通していた。これらの外国通貨の流通は、後になって合衆国政府が創設した連邦貨幣制度によってもさしたる影響もこうむらず、議会が外国通貨の流通を禁じる法案を可決した1857年まで通用しつづいた。

1785年、大陸会議は財務長官ロバート・モリスと駐仏大使トマス・ジェファーソンの発案に基づいて、「合衆国の貨幣単位はドルで、ドルは10進法に基づいて分割されるという新しい通貨法を、イギリス流の12進法の通貨体系を主張する反対派を抑えて可決した。そして1792年のCoinage Act(貨幣法)の制定によって、合衆国は10進法による最初の貨幣を鋳造した。これらの通貨は、出回っていた外国硬貨と区別するために、federal money(連邦貨幣、1806年の言葉)とかlawful money(法定貨幣、1809年の言葉)と呼ばれた。当時の首都フィラデルフィアの造幣局(1786年にできた米国初の公共施設)で発行された最初の法定貨幣は、half dime(ハーフ・ダイム、1792年)銅製によるcent(セント、1793年) half cent(ハーフ・セント)の3貨種だった。1786年には図柄に因んでeagle(イーグル)と呼ばれた10ドル金貨の発行をみた。これらの通貨のデザインのなかには、すぐれたものがあった。例えば、ベンジャミン・フランクリンがデザインしたfugio cent(別名Franklin cent)として知られていた鋳貨の表面は、13州を表す13の相互につらなった輪があり、裏面にはfugio(光陰矢のごとしを暗に指すラテン語)の文字と「自分のことに専念せよ」というフランクリンのモットーが刻ま

れていた。もっとも、各州が新貨幣法を採用するまでにはかなりの時間を要した。ニューヨークを例にとれば、この貨幣法が採用されたのは1797年のことであった。

アメリカで政府による最初の紙幣が発行されるのは、1775年である。この年に各植民地の中央機関である大陸会議は、continental bills(大陸会議紙幣)または単にcontinentalsと呼ばれたものを発行した。表面には「この手形は持参人に対し、1775年5月10日フィラデルフィアで行なわれた大陸会議決定に基づき、3スペイン・ドルまたは同額の金銀を受領する権利がある」という記載があり、この文言の左右には、continental currency(大陸会議通貨)という文字が印刷されていた。図柄は鶴(植民地)が鷺(イギリス)と闘っており、鶴の長いくちばしが鷺の胸にささっているように見える姿が描かれていた。流通手段としてスペイン・ドルが選ばれたのは、イギリス貨幣単位からの独立を意味する。

大陸会議には権限がなかったため、この紙幣は各植民地において法貨に指定され、また法貨としての特徴が法的圧力で強化された。たとえば、これを受け取ることを拒否する者は、罰金、他人にたいする貸金の没収、あるいは交易、取引の禁止などの刑が課せられている。なお、最初の大陸紙幣の発行高は200万ドルであった。だが、その後の通貨インフレによってその価値は急落しはじめ、独立戦争が終わる頃には1ドルは1.7セントの値打しかなかったため、一般にこの紙幣はshucks(無価値なもの)という名で知られるようになった。とりわけ各州が1781年の大陸会議の要請にもとづき、大陸会議紙幣の法貨性を取り消すと、その価値は一挙に消滅した。ここから「三文の値打もない」を意味する not worth a continental という表現が生まれた。

大陸会議紙幣の消滅に伴って、1780年に各州の発行にかかる紙幣が出現するが、この方法も1789年に憲法で終止符が打たれてしまった。次に紙幣の重要な供給源になったのが、州法に基づいて造られた民間銀行であった。最初の民間銀行は、1781年にフィラデルフィアに設立されたペンシルヴァニア銀行である。その後、1784年にボストンとニューヨークに民間銀行が新設された。1800年には、民間銀行数は28行にのぼり、1820年までには307行に達した。これらの銀行は州法によって、自由に独自の図柄の紙幣発行の業務が与えられていたので、紙幣の種類は増える一方だった。紙幣の乱発が基因となって、物価はとうぜん急騰した。1820年には多くの銀行や関連会社が倒産した。

アメリカでは、連邦政府が民間銀行の紙幣発行という業務に介入することを嫌う土壌であったため、大陸会議紙幣が流通しなくなった後暫く政府発行の銀行券は存在しなかった。ところが1861年4月12日に始まった南北戦争が、北部人たちの予想に反して長引く様相を呈すると、銀貨や銅貨が全く姿を消し、紙幣の価値も急速に低下した。そのためLincoln政権は、1862年2月25日の法貨条例でgreenback(グリーンバック)と呼ばれた新種の政府紙幣、1億5000万ドルの発行を決定した。この紙幣は国民感情に訴えることを狙って、表の図柄にはワシントン、リンカン、時の財務長官チェス(時の財務長官)などの肖像がかかげられ、裏面にはグリーンの唐草模様が印刷されていた。だが、その後の戦争の拡大によって発行高が増加し、インフレを招き、戦争終結の頃にはグリーンバック紙幣1ドルは、39セントに落ち込んだ。なお、グリーンバックの呼び名を最初に用いたのは、この紙幣で給料を受け取った合衆国兵士といわれている。次は作家Mark TwainのAutobiography(『自伝』、1871)の一節。「彼等は全く価値のないグリーンバックで支払われる安物で暮らすことになった」。19世紀になると、お金に関する俗語が多く生まれた。1810年頃からアメリカ人は、すべての貨幣をbeanと呼んでいたが、1859年になると特に5ドル金貨を意味するようになった。小銭を指すsmall changeは1810年にできた言葉である。

(前天理大学国際文化学部教授)

## Essay

「大きな古時計」(1876)を再読する  
時計の停止と家父長制度

増崎 恒

2002年、J-POP歌手、平井堅の「大きな古時計」が大ヒット、社会現象になった。「大きな古時計」は元々、1876年に合衆国の童謡作家 Henry Clay Work が作詞作曲、「祖父の時計」(“Grandfather’s Clock”)と題された。当時、楽譜の売り上げ80万部を越えるベストセラーになった。Workの「祖父の時計」を米詩として<文化研究的>視点から再読し、1876年の合衆国と2002年の日本で人気を博した理由を<おじいさんの死と時計の死>という作品の主題に探してみたい。

「祖父の時計」は、「私の祖父の時計は大きすぎて棚に入らず、90年間床の上に置かれていた。」という一文で始まる。語り手=私=時計の所有者(祖父)の孫である。「時計は祖父とほとんど重さが変わらなかった」、「時計は祖父が生まれた朝に買われ」、「喜びも悲しみも祖父と共有し知っているよう」、「祖父が亡くなると動きを止めてしまった」と、祖父と時計との間には奇妙な相似関係がある。一方、時計は、「祖父よりも半分だけ大きかった」と<人間>並みの大きさをし、「忠実な召使」でもあると表現される。この時計は擬人化されている。「祖父」は詩中で「老人」と何度も形容される。この時計は、watchではなく、「振り子」付きの箱時計(clock)である。<時間>は西洋では伝統的に、禿頭に頬髭と顎髭、大きな鎌と砂時計を持つ老人、「時の翁」(Father Time)として擬人化された。祖父の時計は、箱時計が体現する姿形(振り子は鎌を連想させる)擬人化、「祖父」(grandfather)との相似を通して、「父」(Father) = 「時の翁」と同一視されていたと考えてよい。詩は、「時計は老人(祖父)が亡くなると不意に止まって再び動き出すことはなかった。」というフレーズをリフレインする。「祖父=老人=時計=時の翁」の死が強調される。

詩の表題は「祖父の生涯」ではなく、「祖父の時計」である。しかし、詩の内容は祖父中心。祖母(祖父の妻)は、「時計が24時を告げ、祖父は花のように美しい花嫁を連れて戸口に入った。」([H]e entered at the door with a blooming beautiful bride.)という一文で言及されるのみ。それでさえ、動作主体は「彼=祖父」で、「従属」を表す前置詞withを付された祖母は祖父の下位に置かれる。祖

母のエピソードは「祖父=父=男性」中心主義を強調するためにのみ語られる。祖父の子ども(語り手の父親ないしは母親)その他の親戚一同については、臨終の床に集う「私たち」(we)という集合体でしかない。また、詩全体を通して、動詞はすべて過去時制(一箇所のみ過去完了) 祖父と時計の物語は匿名の語り手(孫)が語る過去の出来事に他ならない。

作詩された1870年代の合衆国は、南北戦争も終わり北部主導の下に産業化が進み、「家内制手工業」から「工場制」への移行完了期にあった。都市部に人口が集中、大家族は核家族へと解体、個人主義の高まり、労働の担い手として発言力を得た女性たちによる婦人参政権運動の広がり。南北戦争前から衰退しつつあった、家内制手工業に依拠する、男性中心主義的「家父長制度」は崩壊。老翁の姿で図像化される「時の翁」は「家父長」の象徴だった。大家族の邸宅において、家族の構成員は家中唯一の時計(箱時計)が刻む時間(父なる時間)に支配されていた。しかし、産業化、核家族化が進み、女性が力を持つ中、皮肉にもclockは大量生産されるwatchに地位を奪われる。家父長制度の象徴、「箱時計」は社会文化的に役割を喪失したのである。「祖父」を「偉大な父」(grand father)と読み替えることは可能だろう。詩中、「この時計ほど忠実な召使を見つけることはできない」と祖父は言う。召使を雇える社会的地位に彼がいたことが推察できる。しかし、1876年の合衆国には「偉大な父」の居場所はなかった。祖父の臨終に合わせるかのように時計は止まり役目を終える。同時代的な家父長制度の衰退のメッセージ。語り手が祖父の子どもでなく、その次の世代の「孫」であることも<家父長>の断絶・不在を暗示させる。

Workは北部コネチカット州出身。合衆国の産業化は一方で、深刻な公害、移民労働者の大量流入による社会混乱、個人主義の伸張による共同体の弱化、等々の問題を新たに引き起こした。Workの詩は、動詞の過去時制(過去完了)を用い、孫の目から祖父の時代を<回想>し、懐旧の念で眺める。過去へ向かうこのベクトルがある種のノスタルジーを呼び人気を得たのではなからうか。

2002年、日本で「大きな古時計」人気が復活。「おやじ狩り」(1996)、「失楽園する」(1997)、「ひきこもり」、「児童虐待」(2000)が各年の新語・流行

語として挙がった。高度経済成長とともに核家族化が急速に進んだ日本。家父長不在社会の中で、様々な問題が（崩壊しつつある）家族の内外で新たに生じている。歩を合わせるかのような「大きな古時計」人気。ひょっとしたら、21世紀を生き

る私たちもまた1876年当時のアメリカ人と同様に、「大きなのっぽの古時計」の姿に＜古き良き時代＞を懐古する心情を喚起させられ、魅せられているのかもしれない。

（追手門学院大学国際教養学部専任講師）

## Essay

### アメリカス学会総会及び国際シンポジウム

#### 「アメリカス世界と外国人問題」報告

矢持 善和

去る平成19年11月17日（土）及び18日（日）の2日間にわたり、天理大学アメリカス学会と国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科ブラジルポルトガル語コース共催による国際シンポジウム「アメリカス世界と外国人問題」が天理大学2号棟24A教室で開催された。

初日は正午よりアメリカス学会総会が開催され、平成19年度の活動報告及び会計報告などがなされた。

その後、午後1時より橋本武人天理大学学長の挨拶、矢持善和天理大学准教授からの趣旨説明の後、駒井洋筑波大学名誉教授・中京女子大学教授により「定住化する外国人」の基調講演がなされた。駒井教授は、日本への新来外国人問題について中国人、日系ブラジル人、フィリピン人、韓国人、ペルー人などの低賃金労働者が日本の労働市場においてどのような状況にあるか、また、外国人労働者子弟の教育問題、さらに彼らの定住化傾向が決定的になった事から多文化共生社会にむけての取り組みなどについての解説を行った。

基調講演の後、パネリスト山本匡史天理大学准教授の「メキシコ先住民にみるトランスナショナリズム」、野口茂おやさと研究所研究員の「アメリカスにおける見えざる移民労働者の動き」、吉川敏博天理大学教授の「米国におけるヒスパニック系労働移民と言語政策」、田島久歳城西国際大学准教授の「往復する日系ブラジル人デカセギの精神史」が初谷譲次天理大学教授の司会進行により発表された。

その後、それぞれの参加者によってグローバリゼーションという観点で移民を考えてみたらどうなるか、あるいは、移民をテキストにしてグローバリゼーションを考えてみるとどうなるかの議論、また一方で、ホスト社会では移民を管理するための方法として多文化共生がうたわれることがあるが、国家にからめとられるかたちの「多文化共生」

ではなくマルチチュード形成という観点からみた場合などの活発な議論が展開された。そして、初日の締めくくりとして片倉充造天理大学アメリカス学会副会長より閉会の挨拶が行われた。

2日目は、ヨーロッパ・アメリカ学科ブラジルポルトガル語コース主催で「日本における公教育とブラジル人学校」のテーマでシンポジウムが開催された。大橋正叔天理大学副学長の開会挨拶に引き続いて、吉岡黎明ブラジル日伯交流年実行委員会文化部コーディネーターにより「ブラジルにおける日本語教育」の基調講演がなされた。吉岡氏は、ブラジルにおける日本語教育の現状、移民初期からの日本語学校の歴史、さらに近年、マンガ、アニメ、コスプレなどの影響もあり日本語や日本文化についての関心の高まりについて言及し、平成20年のブラジル日本移民百周年（日伯交流年）についての意義についても解説を行った。

その後、午後1時よりパネリスト高坂香津美大阪大学院生の「高等学校におけるポルトガル語教育の役割」、藤本美知代伊賀市立阿山中学校教諭の「受け入れ校における組織とカリキュラムの見直し」、北森絵里天理大学准教授の「在日ブラジル人の定住と同化をめぐる考察」、武田千香東京外国語大学准教授の「多言語・多文化社会の求める人材育成を目指して」等の研究が矢持善和の司会により発表された。

その後、会場からの意見や質問を受け、それぞれのパネリストが発表テーマに基づいて応答していく形式をとった。会場からは、実際に日本の教育機関でブラジル人子弟の受け入れを行っている教員の意見や、日系ブラジル人サイドから見た日本国政府の受け入れ体制についてのコメントなど活発な意見交換が行われたが、最終的には政府の対応だけに頼るのではなく、日本の子供たちに対応すると同様にブラジル人子弟の教育を我が事として受け入れる必要性を感じさせられた有意義なシンポジウムであったとのコメントも聞かれた。

2日目の最後は、金七紀男天理大学教授の閉会挨拶で2日間にわたるシンポジウムが終了した。

このシンポジウム内容については、本年度のアメリカス学会総会（11月末）までに『アメリカス

世界における移動とグローバリゼーション』（仮題）の形式で、いくつかの研究論文と共に報告・出版予定である。

（天理大学国際文化学部教授）

### 3コースの最優秀論文に 「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、毎年卒業式当日に国際文化学部の英米、イスパニア、ブラジルの各学科の最優秀卒業論文執筆者に対して「酒本真理子賞」を授与してきた。しかし、昨年度の場合は、2003年度に国際文化学部が2学科体制で再編成され新カリキュラムがスタートして2回目の卒業生を送りだしたことから、「酒本真理子賞」をヨーロッパ・アメリカ学科の英米語、イスパニア語、ブラジルポルトガル語の各コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与された。授賞式は、去る3月22日卒業式典直後に開かれ、上記3コースの各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書券2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1989年度に旧英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんに因んで贈呈されるようになった。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂いているが、その一部を「酒本真理子賞」として活用している。

#### 英米語コース：仙波佐知子

“Freedom Riders and the Early Formation of the Civil Rights Movement” [英語論文]  
 （「フリーダム・ライダーと公民権運動の初期形成」）

#### イスパニア語コース：小来田広志

「ルチャリブレに表象されるメキシコ社会 ルチャの深い魅力に惹かれて」

#### ブラジルポルトガル語コース：丹羽英史

「コインブラの大学生とヘブーブリカ生活」

### 編集後記

天理大学アメリカス学会の研究誌『アメリカス研究』第13号の発行は、本年11月下旬に開催の年次大会に合わせてアメリカス学会通算4回目となる単行本形式をとり、『アメリカス世界における移動とグローバリゼーション』（仮題）というタイトルを予定しております。同封の投稿規定の通り原稿を募集しています。原稿締切は5月26日です。奮ってご応募ください。

天理大学アメリカス学会の2008年会計年度は、昨年11月17～18日に開催の年次大会当日にスタートしました。2008年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、至急、郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。

当学会の年会費は、一般会員5,000円です（入会金はありません）。納入は、郵便局で下記の口座にお振り込みくださいますようお願い致します。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口30,000円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター  
 （No. 58：2008年4月26日発行）

編集者：吉川敏博

〒632 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科内  
 天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/